二〇一二年十月十一日　開催

カナダのフランス語圏——ケベック州の社会と文化

ドゥニーズ・ダウ
（執筆＝矢頭典枝）

■講演者……ドゥニーズ・ダウ（ケベック大学モントリオール校名誉教授）
■司会・解説……矢頭典枝

日本を訪れるとは思ってもいなかったため、こうして皆さまにお話しする機会に恵まれて、非常に光栄です。今日は、私が住んでいるケベック州がカナダのフランス語圏であり、他の州とはかなり異なる特徴をもっていることについて論じたいと思います。

カナダの国土と人口

カナダは一〇州と三準州から成る、広大な国土を有する。地域によって気候がずいぶん異なる。たとえば冬、西にあるバンクーバーではほとんど雪が降らないが、東のケベック州は約半年間、雪に覆われる極寒の地である。

カナダは広大であるにもかかわらず、人口は現在約三千四百万人と、日本の人口の三分の一にも満たず、人口密度は低い。カナダの国家レベルの公用語は英語とフランス語であるが、移民の流入により、実際にはカナダ中の家庭で一〇〇以上の言語が話されている。カナダは大きく分けて、ケベック州がフランス語圏、その他の州が英語圏だということができる。しかし、厳密にいえば、ケベック州以外にもフランス語系のカナダ人は居住している。ケベック州に隣接する西のオンタリオ州と東のニューブランズウィック州にも、フランス語系の人々は住んでいる。私はオンタリオ州の首都オタワから四十五キロ離れた小さな町で生まれ育ったが、ほとんどの住民がフランス語系だった。また、首都オタワにもかなりのフランス語系人口が集中する。さらに、北のヌナヴット準州の人口の大半がイヌイット（いわゆるエスキモー）であり、イヌクティトゥット語という独自の言語を話

している。

ケベック州の社会と文化

〈地理と人口〉

ケベックは、カナダの一〇州のなかでは最大の面積を有し、大西洋に注ぐセントローレンス川と呼ばれる水路が歴史的にケベック州の経済の発展に貢献してきた。人口は約八百万人であり、これはオンタリオ州に次いで多く、カナダの総人口の約四分の一を占める。州都は、セントローレンス川の下流に位置するケベック・シティで、私が現在住んでいる最大の商業都市モントリオールには同州の人口の約半分が集中している。

〈政治〉

カナダは連邦制を採用しているため、政治は国レベルと州レベルに分かれて執り行なわれる。ケベック州には一九六〇年代よりカナダから分離独立する動きがあるが、分離独立に反対する「ケベック自由党」と、賛成する「ケベック党」がこれまで政権を奪い合ってきた。二〇〇三年からケベック自由党が州政権に就いていたが、つい先月（二〇一二年九月四日）、ケベック党が州総選挙で勝利したため、ケベック州の分離運動がまた注目されている。しかし、少数派政権であることから、分離独立を問う州民投票は行なわれない、とみられている。

今回の州選挙で恐ろしい事件が起こった。開票結果が判明し、ケベック党の党首であるマロワ氏が勝利宣言をしている最中に、英語系の男が会場で無差別に発砲し、一人が死亡した。カナダ中を震撼させたこの事件は、ケベックの分離独立問題、そして、英語系とフランス語系の対立の根の深さを物語る。

〈言語状況〉

ケベック州の人口の約八〇パーセントがフランス語を母語とし、約八パーセントのみが英語を母語とする。カナダにおいてフランス語系が多数派であるのはケベック州のみである。残りの一〇パーセントが移民の人々で、英語もフランス語も母語としない。

なお、カナダでは、フランス語を母語とする人々をフランコフォン（Francophone）、英語を母語とする人々をアングロフォン（Anglophone）、英語もフランス語も母語としない人々をアロフォン（Allophone）と呼んでいる。アロフォンは移民たちであるが、現在増加しつつある。異なる言語を話すケベック州民の共通語はフランス語である。しかし、昔からそうだったわけではない。最大の都市モントリオールで

は、アングロフォンが少数派であったにもかかわらず、英語都市だった。つまり、大規模な商業施設や企業はアングロフォンが経営し、そこでは英語が業務言語であった。次に説明するように、この状況を一変させたのが言語政策であった。

〈「フランス語憲章」〉

モントリオールの経済界における英語優位の状況を是正するため、一九七七年、ケベック州政府は「フランス語憲章」と呼ばれる言語法を制定することによって、フランス語のみをケベック州の公用語と宣言し、ケベック社会におけるフランス語の優位性を明確にした。立法、司法、行政といった公的部門はもとより、ビジネス、教育、サイン（商業用看板など）表示といった分野まで、フランス語の使用を義務づけた。違反した者には高額な罰金が課せられるほど、拘束力が強い言語法である。

この言語法が制定されるまでは、移民の子供たちは英語系の学校に通い、モントリオールで展開される経済活動では英語が支配的だった。しかし、同憲章の制定により、現在、移民の子供たちは、義務教育ではフランス語を教育言語とする学校への通学が義務づけられ、商業用看板はフランス語で表示されることが規定されている（ただし、現在では、フランス語憲章は修正され、フランス語よりも文字が小さければ、他言語併記も可）。また、中規模以上の民間企業は徹底した業務のフランス語化を義務づけられている。

具体的な例を挙げると、医者、弁護士、看護師などの専門職にあるケベック州民は、フランス語ができなければフランス語を学ばなければならない。電気代などの公共料金の請求書はフランス語で書かれている。店の店員はフランス語で客に応対しなければならないし、経営者はフランス語で従業員と話さなければならない。五十人以上の社員を有する中規模以上の民間企業は、フランス語を業務言語にするように指示される。ケベック社会のフランス語化を監督する「フランス語局」という役所の職員は、フランス語憲章に対する違反が

ドゥニーズ・ダウ先生

フランス語表示のフード・コート
（モントリオール）

ないか、検査して回る。この状況を嫌ってケベック州を去っていったアングロフォンは約三十万人にのぼると推定される。

〈ケベックの四季〉

春――ケベック州の春は三月二十日ごろに始まる。まだ雪は残っているが、ケベックにはこの時期、メープルの樹液がサトウカエデの木から採れる。田舎のほうに行くとあちこちの農家が「メープル小屋」で樹液を煮詰め、小屋を改造したレストランでメープル・シロップを使った料理を提供し、メープル・シロップが入った瓶や関連商品を販売する。メープル・シロップをパンケーキだけでなく、ハムやビーンズにもかけるのがケベック流である。

夏――ケベック州では六月と七月が最も夏らしい。冬は寒いが、夏は逆に気温が三十度を超えることもあり、蒸し暑い。六月二十四日は、ケベック州のみで行なわれているカトリックのお祭り「聖ジョン・バプティストの日」である。最近では、宗教性が薄まり、名を変え、「ケベックのナショナル・デー」と呼ばれている。この日は、ケベック中でパレードやコンサートがにぎやかに行なわれ、ケベックの州旗（青地に白いユリの花と十字架）が翻る。

メープル・シロップ小屋
（撮影＝本間昌策）

秋――十月の半ばはケベックが一番美しい季節。ケベックの紅葉は、赤、ローズ、オレンジ、黄など色とりどりでダイナミックである。特に田舎のほうの紅葉の景色は見事で、この時期、ケベックの人々は散策を楽しんだり、ドライブに出かけたりする。葉が落ちるころにちょうどハロウィーンの日がやってくる。これはケベック州に限ったことではないが、子供たちが一年のなかで最も楽しみにしている日である。女の子はプリンセスや妖精、男の子はガイコツやお化けなどに仮装し、お菓子をもらいに近所を一軒一軒回る。大人たちも楽しむ大イベントである。ハロウィーンが終わると、

「家の前のハロウィーンの写真」
（撮影＝本間昌策）

雪がちらちら降り始める。

冬――十一月から三月末までケベックは雪景色である。マイナス二十度にまで下がる気温に対処するため、ケベックの人々は防寒を徹底している。大量の降雪が日常的になるのは一月と二月であり、雪は背丈よりも高く積もることがある。そのため、家から出るために住人が自ら雪かきをするか、除雪業者と契約を結んでいる世帯も多い。クリスマスの時期は、イルミネーションが街の中心街だけでなく、普通の家をも幻想的な雰囲気に仕立てる。ケベックの人々は、スキーやスケートなどのウィンター・スポーツを楽しんだり、ホーム・パーティーを開いたりして、冬を楽しく過ごす。

〈文化産業――音楽、映画、シルク・ドゥ・ソレイユ〉

ケベックは芸術家の比率がカナダで最も高く、州政府によって文化産業が手厚く推進されている。世界的に有名な歌手セリーヌ・ディオンがケベック出身であることはよく知られている。毎年六月末から七月初旬にかけて「モントリオール・ジャズ・フェスティバル」が開催され、世界中からジャズ・アーティストが集まる。また、八月末から九月初旬にかけて開催される「モントリオール世界映画祭」には世界中から数多くの作品がエントリーする。フランス語によるケベック映画は世界的に評価が高く、アメリカのアカデミー賞作品賞を取ったものも多く、カナダ国立映画庁はケベック映画の制作に力を入れている。

パフォーミング・アーツで有名なケベックが世界に誇るサーカス「シルク・ドゥ・ソレイユ」は、一九八四年にモントリオールで誕生した。もともとケベックに多く存在していた極めて芸術性の高い大道芸人たちが、世界中から集められたアーティストや元体操選手とともに、現在では世界各国でチームを組んで公演をしている。また、Just for Laughs と呼ばれる、いわゆる「ドッキリカメラ」のお笑い番組は、ケベック州で大変人気があり、最近ではアメリカや日本でも放送されていると聞く。

ケベックの人々は、北米唯一のフランス語圏のフランス系住民として、自分の言語と文化に深い愛着をもち、芸術文化の領域で彼らのアイデンティティを表現している。

〈ケベコワとしてのアイデンティティ〉

ケベック州のフランス語系の人々は、自らを「ケベコワ Québécois」と称し、北米で最も早くヨーロッパから入植した人々としての自負を持っている。州都のケベック・シティは、一六〇八年にフランス人シャンプラン（地理学者・探検家、一五六七～一六三五）によって「ニュー・フランス植民

地」として建設され、フランスの中世の街並みのような佇(たたず)まいを漂わせている。街の随所に歴史的建造物や教会が残り、今では観光地として有名である。私が住むモントリオールも、十七世紀前半にフランス人によって建設され、一角に旧市街が残り、近代的な中心街と対照をなしている。

フランス語が分かる人がケベック州に来て驚くのは、ケベック州の車のナンバープレートに“Je me souviens”（「私は忘れない」）と書いてあることだ。この意味の解釈にはいろいろあるが、「カナダ連邦における唯一のフランス語圏の過去、現在、将来」を「忘れない」、つまり「フランス系の言語と文化よ、永遠なれ」と解釈してよいと思う。

カナダの「美しい州 la belle province」として知られるケベック州に、ぜひいらしてください。Arigato!

ケベック・シティの旧市街
（撮影＝本間昌策）